「車いすからの離脱」

～ラグビーの試合中、頸髄を損傷した中大・宇野将史さん～

2011年10月30日、日曜日。中央大学ラグビー部の宇野将史選手（法学部4年）は、チームの要として埼玉・熊谷ラグビー場で強豪東海大に挑んでいた。午後2時開始の後半1分、突如グラウンドから去った。ラックの下敷きになり、のちに頸髄損傷と分かる大けがをした…。

学生記者　関いづみ（文学部3年）

足の感覚がない

ゴリゴリゴリ。

鈍い音が体の内側から響くと同時に、首に激痛が走った。

一瞬、真っ暗になった。

うっすらと目を開くと、グラウンドに倒れていた。投げ出された自分の手が見える。全く動かない。なんだ、おかしい。起き上がれない。担架がきて乗せられた。ヘッドギアが外される。振動で片ほうの手が担架の端から落ちた。だらりと落ちたまま。戻せない。おかしい。おかしい。おかしい。

「ホントにヤバい」

救急隊員が話しかけてきた。

「これ分かる??　これは??」

意味が分からなかった。

「え?　何言ってるんですか??」

「今…足叩いているんだけど…」

「…え?」

叩かれているという足の感覚が、ない。

終わった、あぁ、終わった。運ばれている最中、ずっとつぶやいていた。

◆

ラグビーを始めたのは小学1年のころだ。引っ越し先のマンションに住んでいた友達に誘われ、近所のラグビースクールに通った。兵庫県西宮ラグビー少年団。小学生のスクールには珍しく、バリバリの熱血指導をされた。つらい練習で追い込まれ、中学校

では柔道部に入ったものの、中3で進路を考えたとき、やはりラグビーが頭に残った。

「もっと上を目指すなら、自分には柔道よりラグビーや」友達の誘いもあってスクールに戻る。高校はラグビーの名門・京都成章高に入学した。

兵庫県西宮市の自宅から高校まで2時間近くかかる。毎日朝練があり、放課後は夜10時近くまで練習することもあった。深夜12時ごろ帰宅し、起床は5時半。苦しい練習も、仲間と一緒に乗り越えた。

その甲斐あって、3年次の全国大会（花園）では3位、そのシーズン（2008年度）の高校日本代表候補選手に選ばれた。「大学は東京へ出たかった」。進学した中大の練習もきつかったが、寮生活が楽しかった。トレーニングから帰って、みんなでご飯を食べる。朝から晩まで仲間と一緒。「毎日が修学旅行のよう」だった。

事故に遭ったのは国内最高峰のトップリーグへ行くか、別の道を歩むか、何となく進路を悩み始めた、そんな時期であった。

救急ヘリ

試合当日。中大は前半、調子がよかった。「このままいけば勝てる」気持ちが高揚していた。後半最初のプレーだ。中大ボール。攻守の要のポジション（SO）にいた背番号10は、股下からボールを出す際、ラックの下敷きになった。頭と背骨が、二つ折りになった気がした。

気が付くと首から下が、全く動かなくなっていた。救急隊員は、ドクターヘリを呼んだ。観客席にいた母親と一緒に、競技場近くの小学校校庭に降りたヘリコプターに乗せられる。「母も混乱していて、なに言ってんのか、ようわからんようになっていた」

搬送中の救急ヘリで、頭髪を丸刈りにされた。着陸後すぐに手術をするためだ。「これが、なにげに、すごい、嫌だったんですよね」そのときのことをため息交じりに語る。ヘリの中での丸刈り、それは試合前までの自分との決別であった。

埼玉医大（川越市）で緊急手術を受けた。目が覚めると「ずっと溺れているみたいやった」。横隔膜がまひ気味であったため、呼吸が思うようにできなかった。

吸っても吸っても、酸素が入ってこない気がした。寝れない。しんどい。苦しい。気が狂いそうだった。

「もう、死んだ方が楽なんじゃないか」

そう思ったことさえあったという。

◆

診断結果は「頸椎脱きゅうによる頸髄損傷」（別稿参照）。首の骨である頸椎の5番・6番が傷つき、首から下はほとんど動かない。患者には知らされていなかったが、「一生寝たきりもあり得えます。よくて、車いす。立つことは、もうできないでしょう」両親には残酷な宣告がされていた。

手術で気管切開をしたため、術後2週間はしゃべることさえできなかった。「50音表」が出てきた。言いたいことの文字・ひらがなを探した。

「の」…「ど」…「か」…「わ」…「い」…「た」

これだけでもひと苦労だ。造作なくできていた日常生活が、事故直後からすべて重労働に変わった。両親が付きっきりで身の回りの世話を焼く。動かせない。自分の体じゃない。自分の体が、ない。何もできない自分に苛立った。

事故から4日、呼吸が落ち着いたら泣けてきた。最初の3日間は、生きるのに必死だった。全く考えもしなかった方向に、突然、変わった。見えないこれからを思うと、「めっちゃ泣いた。人生変わり過ぎやろ」

前へ行こうとしたのは5日目だ。「起きてしまったことは、しゃーない。とりあえず日常生活を、自分で送れるようになりたい」前向きとか、開き直りとは違う。そう思うほか仕方ないほどに苦しかった。何も自分でできないつらさが、前を向かせた。

「車いすからの離脱」～ラグビーの試合中、頸髄を損傷した中大・宇野将史さん～

とはいえ、決まったリハビリの時間以外は、何をしたらいいか分からなかった。恐ろしく長くてけだるい一日。「ケータイもいじれへん、ゲームもできん、テレビを見てるしか、することがない」

ラグビー部のチームメートが、八王子市堀之内の合宿所から川越市まで、2時間半かけて、会いに来てくれた。「みんな暗くならんように、明るくいつも通りに接してくれた」友達が部屋にいる時間は、それまでが嘘のように一瞬で過ぎて行った。

試合をテレビ中継（CS放送）で見ていた中学高校の仲間も、たくさん会いに来てくれた。負傷した直後、宇野選手の体は画面に映っている間、ピクリともしなかった。

その後どうなったかわからないまま、画面が切り替わり、試合は続いた。友人らは身の毛もよだつ思いでテレビ画面を見つめていたのだろう。部屋に入ってくるなり、「死んだかと思った。よかった、生きていてくれてよかった」そう言って泣き出した大男がいた。

埼玉医大で医療処置を終え、12月に国立障害者リハビリテーションセンター（埼玉県所沢市）に転院が決まった。埼玉医大で懸命にリハビリを続けた結果、腕は少しだけ動くようになっていた。

リハビリ専門病院に行ったら、もっと動けるようになる。もしかしたら、足も使えるようになるかもしれない。少なからず期待していた。

しかし、移った先で専門医に言い渡された言葉はこうだった。

「あなたの足は、もう動きません。動くところを使って、日常生活を送れるように頑張りましょう」

厳しい見解は、配慮でもあるのだろう。患者に過度な期待を与えることで、新たな失意を生む可能性がある。

でも、あんまりだ。事故から2度目の「終わった」だった。

動いた

両親は、もう動かないとされた息子の足を毎日毎日マッサージした。

「将史、お前は絶対、絶っっ対歩けるようなる!!」「足動かそうとしてみ!」

父は毎日そう言った。

「もう分かったわ」息子がうっとうしそうに言った日もあった。

それでも、毎日続けてくれた。

両親が励ましてくれる一方、自分の心は折れかけていた。リハビリを続けても、一向によくならない。動かそうと、どんなにしてみても、両足は知らんぷりだった。

「もう、だめかもしれん。医者もアカン言うてる。親は動くとはいうけど…それは親やから言うんやろ」

歩けない理由を、無意識に探していた、そんなある日のこと。

いつものように足を動かそうと力を入れる。なんだか、いつもと違う。息が、止まりそうになった。びっくりしすぎて、最初は何が起きたのか分からなかった。

押し黙っていた足の親指が、かすかに動いたのだ。

「ピクリともしないものが、ピクリと、するようになる。これは、でかい!!!」

喜びでパニックになりそうだった。両親は泣いていた。顔中、涙だ。事故以来、曇っていた若者の目前に、希望の光が差し込んだ。

リハビリへの意欲が増し、がむしゃらに続けていた昨年1月中旬。父親が、iPad（アイパッド）を持ってきた。

「黙って見てみろ」

米国サンディエゴ市にある世界唯一の脊髄損傷回復施設。その国内パートナー「ジェイ・ワークアウト」（東京都江東区）作成の動画だった。

衝撃的な映像が、目に飛び込んできた。映っていたのは慶應大ラグビー部の杉田秀之さんだ。2007年8月26日、やはり試合中の事故で、自分と同じ頸椎の5番・6番を損傷した。

信じられなかった。動画の中で、杉田さんは歩いている。嫌々見た16分間の動画に感動していた。

ラグビーつながりで会いに来てくれた。約束の日、杉田さんは病院まで歩いてきた。同じジェイ・ワークアウトでトレーニングを続け、ほとんど車いすを使わずに生活が送れるまでに、回復を遂げたのだという。宇野さんもジェイ・ワークアウトへ昨年9月末から通い始めた。

2学年上の彼に会ったことで事故後ずっと抱いていた幻想が、確信に変わった。

歩く。歩ける。歩けるようになる!!

事故から1年半たった今、懸命にリハビリを続け、支えを使いながら立つ

こともできるようになった。一番の目標は、「車いすからの離脱」だ。

「障害を受け入れると前向きになって人生が変わると言う人もおる。でも僕は、障害を完全に受け入れるのは無理やと思うし、受け入れたら、現状に満足してしまうと思う」

「これまで家族やチームメートだけではなく、たくさんの方々から支援や応援をいただきました。そのおかげでリハビリを継続することができました。感謝の気持ちでいっぱいだからこそ絶対にあきらめません」

この春、大学に復学し4年生になる。後輩たちがあの日からずっと残しておいてくれた合宿所のベッドも春からは新入生が使う。

誰しもの一生が「終わった」と思っても、終わってはくれない。自分は失意のどん底に落ちても、まわりは決して止まらず、目まぐるしく変わっていく。

もう嫌だと思っても、明日も明後日も当たり前のように来る。変化の風は吹き続けるのだ。

体は、事故直後に目覚めたあの日から、何かに溺れているようだ。必死に四肢を動かしているとグラウンドにいる気がする。監督の指示も、ホイッスルも、仲間の足音も、歓声もないが、懸命に戦っている自分がいる。

■脊髄損傷

人間の体を支える脊柱（背骨）は脊椎という骨の集まりで出来ていて、お尻から頭まで連なっています。その脊柱の中心部には脊髄神経という中枢神経の束が収められていて、脳からの指令を全身に伝えています。脊髄損傷とは主に事故などで脊柱に強い力がかかることで、脊椎が破裂（骨折の状態）したり、病気などによって脊髄に損傷を受けることをさします。

■脊髄損傷になってしまうと麻痺症状が出てしまう

中枢神経の役割は脳からの指令を各機能へ伝えること、各機能からの知覚情報を脳へ伝えることです。現代の医学では、一度傷ついてしまった中枢神経はもとに戻らないといわれています。

そのため傷ついてしまった部分より先の全ての機能と脳との信号伝達が閉ざされてしまいます。これが動かせず、感じないという麻痺症状で、こうなってしまうと車いすを使った生活を余儀なくされてしまいます。麻痺の範囲が広いほど動かせる部分が少なく、場合によっては寝たきりになってしまうこともあります。（国際せきずい損傷リハビリテーション協会HPから）

■ジェイ・ワークアウト

日本初の本格的な脊髄損傷専門トレーニングジム。健康維持からトップアスリートまでさまざまなレベルのトレーニングを提供しています。さらに大きな特徴としては、麻痺によって動かせない部分も含めた機能回復を目指すトレーニングメニューは日本唯一です。（同社HPから）

■ラック

地上にあるボールのまわりにしっかりバインディングした双方1人以上のプレーヤーが密集することによって、ラックは形成される。次の攻撃のために、これらのプレーヤーによってボールの奪い合いを行うが、ラックの中のボールを手でプレーしてはいけない。

※バインディングとは、スクラム、ラック、モールでほかのプレーヤーに腕をまわしてしっかり組むこと。（日本ラグビー協会用語集）

社会復帰のために

「宇野将史君を支援する会」（中大ラグビー部、同OB会、同父母会で構成）では募金活動を行っています。

募金の要綱は次の通りです。

▽口座名称「宇野将史（うの まさし）君を支援する会」

▽振込口座　ゆうちょ銀行　（金融機関コード9900）019【ゼロイチキュウ】店（店番号019）

▽口座番号　当座0473160（郵便局　振替口座番号00180−9−473160）

▽募金の実績報告　ラグビー部HPにて適宜

▽問合せ先　電話090−2323−8055　OB会副会長・財務委員長・矢次民和氏